

6章：

学校で初期合衆国史を学ぶ際の「収束」パラダイム The “Convergence” Paradigm in Studying Early American History in the schools

担当：川口広美（広島大学大学院教育学研究科）

hkawaguchi@hiroshima-u.ac.jp

■ 著者情報

著者名：Gary B. Nash

研究関心：歴史学者。アメリカ史の革命（アメリカ独立戦争期？）が主領域。特にマージナライズされてきた人々の視点から歴史を見直すということを行っている。

経歴：プリンストン大学で BA 及び PhD を取得している。1966 年まで instructor 及び assistant professor を勤めた後、UCLA に移動。1966 年から assistant professor, associate professor を勤め、1972 年から professor をつとめている。National Council for History Education の設立メンバーでもある。論文多数。

■ 重要な用語

- ・ inevitabilist explanation：必然主義的説明
- ・ scholarship：学術的
- ・ cultural encounter: 文化的出会い、文化的遭遇

■ ひとこと概要

筆者はマジョリティ中心的な合衆国史の描き方に否定的な立場をとり、現在の社会を「相互浸透世界 (interpenetrating world)」と捉えている。この章では、初期合衆国史におけるアメリカン・インディアンとアフリカ系との「文化的遭遇」について、歴史学がどのように現実に根ざして・センシティブに捉えられるようになったか、どのようにゆっくりとその成果が教科書に反映されるようになったか、を歴史学と教科書執筆者との視点から、18世紀～現在（2000年代前半）にわたり年代史的に描いているエッセイである。

■ まとめ

1. 年代ごとの歴史研究・歴史教育の変化

○公教育当初～20世紀初頭：アメリカの公立学校では、ヨーロッパ人・アメリカンインディアン・アフリカ人との関係はいわゆる「必然主義的説明 (inevabilist explanation)」として描かれていた。

- ・南北戦争以前：個人の力を超越した力で作られた＝「不可避の (inevitable)」「避けられない (inexorable)」といった表現での歴史的説明。

例) *More Geography made easy* 「ニューイングランド州でアルゴンキン族が急速に減少したのは、神のお導きによるもの」

・南北戦争勃発後：避けられない紛争と征服であったという前提が全面に出る

例) George Bancroft による合衆国史：原住民は「生活文化に無知」「遺伝的に怠惰な人種である」

・19世紀後半：科学的な人種差別主義の影響。インディアンが減少したのはインディアン自身の努力不足との認識。

例) 「インディアンは文明を理解しないだろう。そのため、彼らや彼らの森は共に滅亡すべきなのである」

・20世紀初頭（基本教育で合衆国史を学ぶ割合がかなり増加）：

①アフリカ系アメリカ人についても同様の観点で学ぶように。

例) Roosevelt 執筆 *Winning of the west*：大量虐殺を「(白)人種の偉大さと文明的な人類にとっての必然である。究極的に有益なものであり、不可避のものであった」と表現。

②少数派の人たちが、「必然的」な描き方に反対の声を上げ始めるものの、一部に留まる

○1930年代：「プラグマティック革命」－歴史的判断は暫定的、過去を複数の視点で見ることが有益－

・ハロルド・ラッグ（進歩主義教育運動の担い手、Robert Park のようなインディアンやアフリカ系文化の見直しを行った文化人類学者や社会学者の熱心な読者）：「オープンマインドネス」「クリティカル・マインドネス」を重視

例) 「大勢のヨーロッパ人が散り散りになったインディアンを追い払うのは正しいことか？」

○2次大戦後：支配的な国家主義的ナラティブに挑戦する基盤を作った歴史学者が登場

→DeVote や Stamp らはそれらを少し教科書に反映させようと試みる

→冷戦期への突入：国家主義的ナラティブに挑戦的な教科書はほとんど採用されず。

例) Chitwood 'A history of colonial America': 奴隷制度は肯定的なものであり、アフリカへのコンタクトをとる研究は無意味

○1959年～：ほとんどの高校・大学生において、奴隷制に対してもより現実的で、自己正当化的でないアプローチがとられるように

例) Hofstadter, Miller and Aaron: 1675年～76年のフィリップ王戦争や多様な戦争は「原住民からの温かい出迎え、戦争開始、原住民の追放や駆逐」といったサイクルで起こると記述

○冷戦期：反人種主義に関する研究関心が抑えられた一方、新世代の歴史家たちは熱心にインディアンやアフリカの歴史を研究している。教科書は、古い言説中心だったが、徐々に氷河の解体 (glacial creep) は進行。

・1970年代：Nashら歴史学者が伝統的な植民地期の描き方への問題性を指摘

・1980年代：
 ・大学 (college) レベルの合衆国史の教科書に、アフリカ史やインディアン史が統合されるように
 ・合衆国史の教科書の分析研究が活発に行われる

(例) 現在の学術研究とのズレや明るい物語に統合するためにネイティブ・アメリカンの経験を変容させているというような指摘 (Hoxie, 1974)

・大学前教育では、依然として必然主義的な言説及びヨーロッパ中心主義が多い

○1990年代：インディアンとアフリカ系の人々を包括した歴史研究の進展。大学前の歴史教育が変容

① National Assessment of Education Progress US Department of Education

→子どもの歴史的リテラシーを測定するための試験を作成するためのフレームワーク

→26名の歴史学者・ベテランの教師・行政官・プライベートセクターの代表・市民数人からなる委員会で形成

→8つの時代区を採用はじまり：「3つの社会とアメリカでの出会い（～1607年）」

② ナショナル歴史スタンダードにも影響

→ジェームスタウン。ヴァージニア・プリマス・マサチューセッツ以前のアフリカ人やネイティブアメリカンにも多く言及するように。アメリカ文化は3者のダイナミックな相互作用によって形成されてきたという記述

→こうした記述の背景：大量の歴史学の研究成果が反映されている

○現在：多くの団体の抗議や学術研究の進展に伴い、必然主義的な記述を行う大学・高校の教科書はほとんどない。

・典型的な教科書では、「初めてのアメリカ人」という章から始まり、原住民の豊かさを表している

→これにより、原住民の物語の保全も図ろうとしている

2. 歴史教育の変化が生徒にもたらす影響

① 国家の物語（national story）に関わる全ての人々を基本的には公正に見ることができるようになる。多くの要素が無視されてしまえば、多数（pluribus）から出た1つ（unum）は生み出されないことを理解できる。

※ 註：エ・プルリブス・ウヌム（E pluribus unum）＝「多数から一つへ」を意味するラテン語の成句。

「多州から成る統一国家」であるアメリカ合衆国のこと。1995年までのアメリカのモットー。

② 古い解釈に立ち向かうことと愛国的であることは矛盾しないことが分かる。「人種の統合としてのアメリカ合衆国（the United States of United Race）」（by Wendell Phillips）であることをポジティブに受け止められるようになる。

③ 歴史における目的論的思考の危険性を学べる（註：必然主義に対するアンチテーゼ t = 個々人は社会構造に拘束はされているが、自分が行いたいように行うことができるということ）を学べる

④ 勿論、文化対立や紛争は起こっている一方で、人々は多様なところでいくつかの文化的融合が行われている。＝これは民主主義を学ぶ際に非常に重要な役割を持つだろう。

■ 議論のトピック

・歴史学の変化と歴史教育の変化の関係性の描き方はこれでよいか？特に、方法的ディシプリンには注目していないが、そうした解釈はどうか？

・本章で描いている生徒にもたらす影響とペダゴジーとの関係（教科書に書いてあれば生徒に伝わるの？）

・州ごとの違いはどうか？